

# しもこまつ 下小松古墳群

かわにし 川西町



川西町北西部の標高220m～290mの丘陵中に広がり、4世紀から6世紀に築造された約200基からなる東北地方最大級の古墳群である。6支群に分けられ、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳などが認められる。このうち薬師沢支群、鷹待場支群、小森山支群に属する179基が国史跡に指定されている。

下小松古墳群が造られた米沢盆地は、日本海側で前方後円墳が継続して造られた最北の地域で、蝦夷の領域である北東北への勢力拡大をうかがうヤマト王朝の最前線であったと考えられる。

川西町教育委員会による発掘調査の結果、鉄剣や鏃などの武器類、青銅鏡、ガラス玉、農具などの副葬品が出土した。また、古墳の周囲からは儀式に使われた土師器や須恵器の土器類も見つかり、これらの出土品は“川西町交流館あいぱる”内の埋蔵文化財展示室で公開されている。



展望良好のT41号墳丘上。



様々な動植物も観察できる。



駐車場設置の説明板。



↑ 吾妻連峰と米沢市方面を一望。



分岐箇所には所々に案内板がある。



最初に調査されたK36号前方後円墳。復元整備されている。

# やまがたの遺跡めぐり 史跡めぐり Vol.5

## まがいぶつ 大森山の磨崖仏

ひがしね 東根市



東根市の南東、大森山南麓にある鎌倉時代末期の1300年頃の作と推定される石仏である。自然の岩壁や露岩、あるいは転石に彫り込まれた仏や明王等を総称して磨崖仏と呼ばれる。平安時代後期から鎌倉時代にかけて盛んに造立された。

当磨崖仏は高さ5m、長さ6.5m、厚さ3.5mという大岩に仏像が線彫りされている。上段の大きい石室には四体の五智如来が見られ、残る一体の左端の像は未完成のままである。下段の小さい石室には六地藏が刻まれている。後方には通称「ホイト（乞食）穴」と呼ばれている洞穴があり、その左上方にも小さな磨崖仏が認められる。

岩質は軟らかい凝灰岩で、長らく風雨にさらされていたため風化が激しいが、山形県内では最古の磨崖仏とされ、昭和62年（1987年）に東根市の有形文化財の指定を受けた。



周辺は切り立った凝灰岩の岩壁が林立している。



説明・案内板が磨崖仏正面の左側にある。



磨崖仏後方の洞窟。ここにも仏像が刻まれている。



現在は雨除けの赤い屋根が掛けられている磨崖仏。上段石室に五智如来、下段に六地藏が認められる。上段左端の像は未完成となっている。

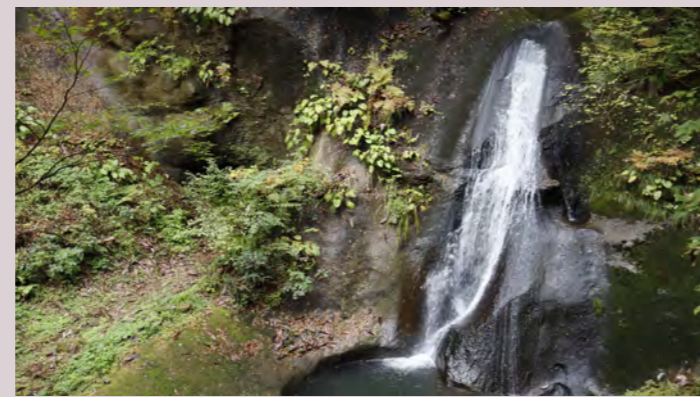




金山町谷口地区に、新庄藩初期に繁栄し、その財政に貢献したと伝えられる銀山の遺構が残っている。最上義光がこの地を支配した戦国時代末期の16世紀末には採掘されたが、本格的に開発されたのは近世に入り新庄藩主戸沢政盛が入部してからである。

寛永初年頃から慶安年間（1624～1652年）にかけての20余年の最盛期には坑道66、鉱夫屋敷3,000軒、精錬所56のほか、芝居小屋7軒、遊郭70軒などを有し、都のように賑わっていたと言われている。相当の産銀があり、戸沢藩初期の“ドル箱”であった。その後、坑内に出水があり排水工事に悩まされ続け、水抜きが困難となったため弘化2年（1845年）に廃坑となった。

歴史的にも貴重なことから、平成11年（1999年）に金山町7番目の指定史跡となり、現在は舗と呼ばれる坑道の一部が復元され通り抜けることができる。地区の有志で組織する保存会では、訪れた方が安全に当時の様子を体験できるよう、環境整備やガイド案内に取り組んでいる。



案内板・解説板と指定史跡の標柱。その背面に坑道へ至る坂道があり、滝を眺めながら上り下りする。



大切舗跡の碑が坂道の傍らに建つ。



金山町教育委員会提供

↑ 川を渡って滝の隣にある坑道の一つ大切舗（おおぎりしき）跡に至る。

← こちらが坑道探索が可能な新大切舗跡。要予約で保存会の方が分かりやすく解説してくれる。



鳥海山の南西麓に位置し、縄文時代早期から晩期までの非常に長期にわたって営まれた遺跡である。平成7年（1995年）に実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査において、通常は残らない動物質や植物質の遺物が層位的に出土し、古環境や生業など縄文時代の生活全般を考察する上での貴重な情報が得られ、全国的な注目を浴びた。このため、遺跡の中心部は遊佐町土地開発公社が買収し、現状のまま残されることになった。

これを機に、平成10年（1998年）から継続的な発掘調査が実施された。特筆される遺構として、集落と周辺の水辺環境の利用を目的とした水辺遺構がある。敷石と杭列や木敷を組み合わせで構築されており、これまで見られなかった構造例として注目を集めた。また、当時のシカやイノシシといった動物遺体（獣骨）が出土したことにより、低湿地における縄文時代の食生活の復元と、前期から後・晩期までの変遷を辿れる貴重かつ情報量豊かな資料が得られた。

このように当遺跡は、動・植物質の遺物が生々しい状態で土器や石器と共に出土し、本州日本海沿岸北部における縄文文化を解明する上で比類のない重要な遺跡であることから、令和2年（2020年）に国の指定史跡に登録された。



小山崎遺跡の航空写真。遺跡南辺を鳥海山腹の湧水を集めた牛渡川が流れる。

右の航空写真、中段・下段の遺構検出と遺物出土の写真は遊佐町教育委員会提供



低湿地部での縄文土器出土状況（第1次調査）



敷石や杭列が認められる水辺遺構（第18次調査）



廃棄場跡からは生々しい獣骨が出土した。



現地に建つ説明板。遺跡は調査区域を埋め戻し、現状のまま保存されている。

